



Vol. 83

CONTENTS

- 【コラム】 諸外国で広がるオープンな教育学（Open Pedagogy）の提案… 重田 勝介
【解説】 大学間連携事業における遠隔非同期型 e ラーニングの質保証の取り組み… 高橋 暁子
【解説】 情報入試のすゝめ… 寛 捷彦・中山 泰一

COLUMN

諸外国で広がるオープンな 教育学（Open Pedagogy）の提案



インターネットを通じて教育学習を促進する活動である「オープンエデュケーション」は、いまや社会におけるオープン性（Openness）追求の主要な柱となりつつある。昨年 2017 年は“Year of Open”と銘打たれた 1 年で、世界各地でオープン性をテーマにした数多くのイベントや Web 上でのセミナーが開催された。2017 年は“Open”にとって特別な年であった。15 年前の 2002 年は OER（Open Educational Resources：オープン教材）の用語が初めてユネスコで用いられ、最初のクリエイティブ・コモンズ・ライセンスが使用された年でもあった。現在、オープンアクセス、オープンデータ、オープンサイエンスなど、多様な分野における“Open”な実践や議論が進展しているが、オープンエデュケーションは教育におけるオープン性を実現するアプローチとして国際的に確固たる位置を占めつつある。

昨年、オープンエデュケーション関連の実践事例に関する発表が数多く行われる学会 Open Education Conference に参加した。この学会では近年、主に 2 年制大学（カレッジ）向けのオープン教科書（Open Textbook）の開発や、オープン教科書の導入による教育コスト削減事例が発表の相当数を占めている。特に米国においては、オープン教科書の普及が米国内における教育格差の是正に寄与することが大いに期待されている。この大きな流れの一方で、費用削減効果に限らない OER 導入の意義を再定義しようとする動きもある。これが「オープンな教育学（Open Pedagogy）」である。

オープンな教育学の定義はまだ定まっておらず、さまざまな研究者や実践者が事例を挙げつつその概念を模索している段階である。その中で David Wiley は Open Pedagogy を“OER-Enabled Pedagogy”と言い換え¹⁾、授業の課題として教材やクイズを作る際に、既存の OER や前年度の学生が制作した OER を改変して作ることを許す、すなわち制作活動を取り入れた授業の中で OER を教育素材として用いるような活用方法を提案している。オープンな教育学は、講義型の授業よりもアクティブラーニングやプロジェクト学習など、より能動的な学習を促す場面での OER 活用を想定しているようだ。

オープンコースウェア（OCW）に代表されるような、インターネット上で自由に利活用できる OER が数多く蓄積されている。オープンコンテンツが単なる無料教材ではなく、オープンライセンスを伴う教育学習目的に自由に手を加えられる素材として認識され、教育のオープン性をより高めることが、オープンな教育学のアプローチを介して期待されている。

参考文献

- 1) Wiley, D. : OER-Enabled Pedagogy (2017), <https://opencontent.org/blog/archives/5009> (accessed 2018.3.30)

重田勝介(北海道大学)